

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 地域や学校の状況

当地域は、陸中海岸の南、大船渡市の最南端に位置し、太平洋に突出した半島である。北西の一面に山を負い、北・東・南の三面は海に面し、風光明媚な観光地として知られている。

東北地方太平洋沖地震による巨大津波により当地域は、甚大な被害を受けた。特に被害の大きかった小河原・門之浜・西館・泊里・細浦・小細浦地区等、家屋が流出した児童は60名に上り、体育館は避難所として2ヶ月余り使用され最大200名近くの地域住民が居住することとなった。その後、校庭に応急仮設住宅が建設され体育館は使用可能とはなったが、児童の活動が制限された状態は5年半以上継続した。平成28年秋の仮設住宅撤去に伴い通常の学習活動が可能にはなったが、児童の学力や運動能力の低下、精神面での不安定などの抱える課題は少なくない。また、震災前から見られる人口減など、地域全体の衰退も大きな問題であり、地域の復興を力強く支えていく有為な人材育成が強く望まれるところである。

そこで、郷土（当地域や本市）に係る学習を充実させていくことで、地域や郷土のよさについて理解を深めさせ、さらには郷土を誇りに思う気持ちや郷土を愛する心情を高めさせていきたい。

2 地域の災害リスクや社会的環境の特性

津波による災害の懸念と常に向き合っていかなければならない当地域では、防潮堤の建設などは順調に進められている。だが、東日本大震災から得られた大きな教訓（「津波等による災害は完全に防ぎ得るものではなく、まず命を守ることが最優先であること。常日頃からの備えの充実など、自助・共助を実現するための意識改革と地域コミュニティづくりが大切であること」）をいかにして根付かせていくかが大きな課題である。

より適切に防災・減災を実現していくためには、大人と子どもたちの共通理解をもとにした意識の共有が不可欠であることから、復興に係る教育で学んだことを児童自身によって表現すること、発信することが重要であると考え。また、復興を

力強く推進していく人材を育成していくためには、当地域のもつよさ、強みなどについても十分に理解させていき、郷土に対する誇りをもつことを大前提に、命を守る学習を進めていくことが重要である。

以上のことから、本校においては、従前の郷土学習を見直し地域との連携・協力のもとに組織的・計画的に進めていくとともに、「児童による発信」を通して地域の防災力を高める学習活動を工夫していくようにしたい。

II 取組の概要

1 各学年の取組

（1）3年生「見つけよう末崎のじまん」

オリエンテーション・課題設定

「末崎の自慢って何だろう。」

調べたいことを以下の5項目にしぼった。

- ①末崎わかめの歴史
- ②わかめの育ち方
- ③わかめづくりの後継者の問題
- ④わかめの出荷
- ⑤おいしいわかめの料理

調査1「自分たちで調べてみよう。」

社会科副読本やインターネット、図鑑などの資料を使って調べた。子どもたちの「もっと調べたい。」という思いが高まっていった。



調査2「もっとくわしく調べてみよう。」

わかめ加工工場の方に来校していただき、実際にわかめに触れたり、簡単な実験を行ったりして知識を深めていった。



表現「わかめの美味しさを自分たちで確かめよう。」

わかめ加工工場の協力を受け「わかめごはんおにぎり」を作り全員でいただいた。わかめの秘密（栄養素や大きさなど）をたくさん知り、「わかめをもっと食べよう。」と目を輝かせる姿が印象的であった。



(2) 4年生「椿探検隊」

オリエンテーション・課題設定

「椿は本当にたくさんあるのかな。」

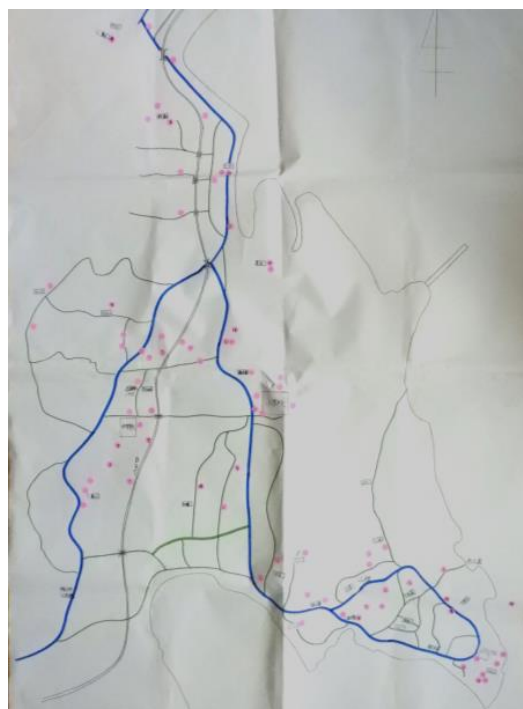
「自分たちの家の周りや地区などにどのくらい椿があるか知りたい。」という意見がたくさん出され、実際に調べて、白地図にまとめていくことにした。

調査1「自分たちで調べてみよう。」

学区が広いこともあり、登校時や休日を利用して、自分の地区を調べることにした。結果、家の周りや通学路にはたくさんの椿が咲いていることに驚きを感じ、さらに、「町内全体にも同じように咲いているのか」という課題を立てることができた。

表現1・発信1「椿マップをつくろう。」

各自調べたことをもとに大きな白地図にシールを貼っていき、オリジナル椿マップを作製した。



表現2「椿油を使って、豚汁パーティーをしよう。」

地域の方のご厚意で椿油を提供していただき、椿油を使った料理（豚汁づくり）を行った。また、昨年度まで活動（搾油体験や椿の実集め）と今回の学習を受けて、「椿は貴重な資源だから大切にしたい」と意識を高めることもできた。



(3) 5年生「末崎・大船渡PR隊」

オリエンテーション・課題設定

「末崎の自慢って何だろう。」

末崎町の観光地や特産品など、自慢することができるものを自由に出し合い、素晴らしさをもっと詳しくあるいは分かりやすく伝えていくにはどうしたよいかという観点から、「パンフレット作成」という活動を行っていくことを決定した。

調査1「自分たちで調べてみよう。」

「まず自分たちの住んでいる末崎の自慢を見直そう」と投げかけ、大船渡市博物館、碁石海岸の雷岩や町内にある穴通磯などの見学を行った。

また、市外の人々に大船渡の自慢も伝えるために、大船渡魚市場の見学を行い、紹介したいものについて意欲的に調べていった。



表現1 「末崎や大船渡の魅力いっぱいのパンフレットをつくろう。」

パンフレットの内容の適否について話し合ったり、調べ方や表現についてアドバイスし合ったりして、終始協力して、作業を進めることができた。



発信「仙台で（修学旅行で）末崎や大船渡のよさを発信しよう。」

学習を通して、これまでに十分に知らなかった末崎町や大船渡市のよさに気づき、楽しくパンフレットづくりに取り組むことができた。「修学旅行で、仙台で配るのが今から楽しみになった。」など、次の活動に向けての意欲も高めることができた。

(4) 6年生「末崎わくわく探検隊」

オリエンテーション・課題設定

「末崎について地域に発信しよう。」

「末崎の素晴らしさを伝えるためにはどうしたらよいか。」と投げかけ、紙芝居づくりというゴールを設定した。

作品のテーマも「津波（津波防災）」「末崎の魅力（観光）」「絆（伝統芸能）」の3つにしばることにした。

調査1 「自分たちで調べてみよう。」

それぞれのテーマの基本情報となる事からについて、インターネットや本で調べていった。

さらに詳しく知るために、七福神保存会の前会長に来校していただき、知りたいことについてその都度質問をしながら、学級全体で理解を深めていった。震災当時の様子や復興にかける思いなども話していただき、大変有意義な時間にする事ができた。



表現1 「調べたことをもとに紙芝居をつくろう。」

読み聞かせをする対象を子ども（保育園児）から大人までとしていたので、長過ぎる内容にならないように1作品の枚数を表紙も含めて8枚前後とした。



発信「紙芝居で自分たちの思いを伝えよう。」

できあがった作品は、自校で印刷シラミネートをして完成。3学期から「読み」についても役割分担をし、練習を重ねていった。2月上旬には、保育園を訪問し園児（4歳児と5歳児）に読み聞かせを行った。保育園児たちは最後まで集中して聞いてくれた。「発表できて嬉しかった。」「この学習で、震災後の様子について初めて詳しく知ることができた。」などという感想が話された。



(5) その他「いきる・かかわる・そなえる」の学習

○キャップハンディ体験

昨年度までは4年生のみを対象に行っていたが、進んで人とかかわり共に生きていこうとする心情を育てていくのには、相応の長い期間を要することから、今年度は3年生以上の各学年にその内容を振り分けて、実施することとした。



点字体験に挑戦（3年生）

○集団下校訓練

地区ごとの集団下校を行うときには、「下校途中に大きな地震が発生したとき」を想定した避難訓練も行った。



○道徳の授業の充実

特別の教科道徳を校内研究に位置付けたり、全保護者や学校評議員等への授業公開を行ったりしている。



○様々なボランティア活動

ボランティア委員会児童による募金活動や支援でいただいた花苗の移植作業などを行った。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- ・ 本校の復興教育（特にも郷土学習）について、改めてカリキュラムを見直し、充実した学習活動を実現する機会とすることができた。
- ・ 子どもたちに防災のあり方や自分たちの地域のよさについてより深く理解させ、地域を愛する心情を養う契機の一つとすることができた。
- ・ 様々な教育活動において、地域とのつながりを深めることができた。

2 課題

- ・ 地域との連携・協働を引き続き推進していく上で「無理を生じないような体制づくり」を工夫していかなければならない。
- ・ 発信した効果を検証することを通して、今後、学習内容等を吟味していく必要がある。